太宰府の文華
～公文書館だより㊶～

江戸時代の紀行文(1)～「宇佐詣記」～

コロナ禍の影響で旅行をするのも憚られる昨今ですが、そもそも旅行が庶民の娯楽として定着したのは江戸時代のことといわれています。福岡教育大学名誉教授の板坂耀子（いたさかようこ）さんによると、江戸時代に書かれた紀行文は現在、2千500点ほど残っており、書名などからそのうち60点あまりが九州にかかわるものではないか、とされています。また、九州の紀行文によく登場するのは、長崎と太宰府で、この二カ所については丁寧で詳細な記述がなされていることも指摘されています。

こうした紀行文のひとつに「宇佐詣記」があります。平戸藩士奥島景就（おくしまかげなり）の手になるもので、書名のとおり、宇佐宮参詣を目的とした旅行の記録です。文政2（1819）年9月11日に出立、従僕平次郎を従えての二人旅で、10月7日に家に帰りつくまでが記されています。

平戸から武雄・佐賀・久留米・日田を経て宇佐に入り、無事、宇佐宮参詣を済ませます。その後、求菩提山・彦山に登り、秋月を通って、9月25日、「武蔵の湯町」（二日市温泉）にたどり着き、温泉に入りました。翌26日、天拝山に登り、ふたたび湯町にもどり湯に入ってから、太宰府天満宮に向かいます。この日はあいにくの雨だったことから、とりあえず「鳥居の前なる大津屋」にとどまりますが、その雨も夕方にはやんだので、「観世音寺・戒壇院・都府楼の跡」を訪れ、その時の様子を記しています。

この紀行文は、「奥島家文書」の一点として、現在、長崎県佐世保東漸寺のご住職を勤める奥島家に伝えられています。ご住職にお聞きしたところでは、この景就は絵が上手だったとのことで、この「宇佐詣記」でも要所々々に挿絵が描かれています。太宰府の周辺では、まず「武蔵湯町の図」があり、川沿いにある湯屋の様子がわかります。また、政庁跡周辺では、「観世音寺戒壇院都府楼之跡石礎図」という俯瞰図とあわせて「筑前御笠郡都府楼礎石遺在の図」および礎石の形状を描いた図が添えられ、礎石に関する所見が記されています。田圃のなかに点在して遺る大きな礎石は、その昔が忍ばれるものとして深く印象に残ったのでしょう。

この「宇佐詣記」については、『年報太宰府学』第8号（2014年刊）に、全文の翻刻とすべての挿絵を掲載していますので、ぜひご覧ください。

太宰府市公文書館　重松（しげまつ）　敏彦（としひこ）